

電話やメールから聴こえてくる子どもの声

2019年度、チャイルドラインにかかってきた電話などから特徴的なものを、三重県の子どもの声を中心に、全国からかかってくる子どもの声を参考にして分析しました。また社会的背景も考慮しました。

1 相談、そしてその後

対等な関係性の中で、人に話をし、聴いてもらうことは、子ども自身が自分の力で問題を解決していくための大切な過程であり、自分で意思を決定することで自分への自信や、いっしょに考えてくれる人がいることで、人への信頼感につながると思います。

2 いじめたくなる気持ち

子どもがいじめたくなる気持ちは、イライラやムカつきなどのストレスが原因ではないかと思われれます。その背景には、学校は点数で評価され面白いことが何もない、また、家庭では親に管理され、幼児期から塾や習い事、スポーツなどで忙しく、家庭が安らぎの場ではなくストレスの場になっていると思われれます。地域では、仲間と集団で遊んだ経験がないことで相手の気持ちがわからないなど、子どもの心が年齢相応に発達していないということが考えられます。

3 精神的な貧困

経済的にも豊かで、物質的にも不自由なく暮らしている子どもたちの中に、心が寂しい、関わって欲しい、気持ちを受けとめてほしいと、精神的な貧困を訴えてくる子どもがどれほど多くいることでしょうか。特別なものではなく、日常生活が繰り返される中で、自分の存在が大切にされていないと感じることができたら、子どもは安心でき、自分はここに居ていいのだと思えるのではないのでしょうか。

4 あそびは学び

あそびは本来自発的なものです。意欲・好奇心からスタートし、さまざまな体験が学びになります。主体的に行動して得た体験や知識は智慧になって子どもたちの生きる力になります。あそびが子どもの成長と発達にとって大切な学びの場であることを社会が再認識していくことが必要だと思えます。

5 人格の空洞化

成長の途中で「自分って何だろう」と自分を振り返り自分を見つめる時期がなかった子どもたちは、全てのことに疑問もなく過ごしていくのではないかと思います。他人から求められる姿が大事で、自分そのものには興味がないのかもしれない。周りの環境と共に、人格を確立するという事を思いもせず、人格の空洞化に至ったのではないかと思います。

インターネットを通じた相談

オンライン相談 (チャット)

毎週土曜日 午後7時～9時まで
(12月29日～1月3日はお休み)
「文字でつながる / 気持ちを伝える」
／思いを受け止める
2019年度は30件のメールを受信しました。



～返事がほしい～ MIEちゃんに聞いてみよう

返事はホームページ上でみんなも見られるように掲載します。
～MIEちゃんの手紙を見る～をみてね！
2019年度は38件のメールを受信しました。



～返事はいらない～ 子ども専用メール

～誰かに気持ちを伝えたい～
2019年度は29件のメールを受信しました。



【発行】 認定 NPO 法人チャイルドヘルプライン MIE ネットワーク
〒514-0125 津市大里窪田町 2709-1 TEL&FAX 059-211-0024
E-mail info@childhelpline Mie.net http://www.childhelpline Mie.net/
【サポート】 子どもの心を受け止めるネットワークみえ

概要版 詳しくは、「年次報告」をご覧ください。



チャイルドラインMIE・こどもほっとダイヤル

2019年度 年次報告

(2019年4月1日～2020年3月31日)

2019年度 年次報告 「はじめに」より

人格の空洞化とはどのような状態を指すのかと考えたとき、芯のない人格というイメージが浮かび上がってきました。つまりそれは、その人そのものである主体の確立がなされていない、ということになるのだらうと思います。然らば主体とは？となる訳ですが、権利と同様訳語なので(私はそうだと思ってきました)、日本人の感覚には馴染みにくい言葉であることは確かですがそれはそれとして、客体に相対する言葉として用いられていると考えられます。私という存在が私であることの証。当然食べて飲んで寝て、という生物学的なものを越えた人間だけが持ち得る思考、思想の分野です。考え、決定し、行動する私そのもの。世界に二人とない私という人間が、己の生き様を己の意志によって切り開いていく力の基礎になっているものと思うのです。

夢や理想に向かって、自己実現を可能ならしめる意欲は、主体の確立あって初めて成されると、私自身は考えている人間です。だからなのでしょう、チャイルドラインやこどもほっとダイヤルに入る子どもの声を聴いていると、「あなたのことでしょ！あなた自身はどうしたいの？」と近くにいたらその子の体を揺さぶって聴いてみたい気持ちに駆られることしばしばです。自分という存在、その自分が他者とどんな関係をきり結びたいのか、皆日本人の意志を感じ取れないのです。その子どもの中に自分がどうしたいという思いが無い。或いは薄い。それより行動を起こしたときに他者にどう見られるかばかりが気になって、あれやこれや自分勝手に想定をめぐらし、自分が想定したことに振りまわされている。独り善がりで結局他者との関係をつくることができず、悶々としているのです。数多くのそんな場面を子どもたちは、電話を通して又はメールで見せてくれます。私の中に歯痒さも伴った何故子どもたちはそうになってしまうのだろうかという「？」が頭をもたげてきます。

見渡せばなんと身近に、電話を掛けてくる子ども達の 30年先 40年先の姿があるのです。その人たちの意志や意欲が育っていないのは、子ども時代に気持ちを聴いてもらってないから。親(養育者)が又はそれ以外の大人も含めて、自分たちで決めてしまい、それをさせられ続けてきたから。つまり常に主体は親(養育者・大人)で、子どもは客体という支配・被支配関係が成立しており、しかもそれが継続的な日常という成育歴にあった…。子どもである本人が意識するしないに拘わらず、自我を放棄して親(養育者)に抗うどころかむしろ積極的に親(養育者)の期待に応えるいい子でいた。そのことによって愛されるとも信じてきた。事実親(養育者)にとっては都合のいいことであり、おおかたの人は条件付の偽りの愛を得てきているようだ。

何があっても子どもはそこで生きるしかないことは事実で、そして一番愛して欲しい存在の親(養育者)からのプラスの評価は、喜んで余り有ると想像にかたくないことではあるけれど、厳しい言い方をすれば、自我を親(養育者)に売り渡してしまった、と云えなくもないと思うのです。勿論その年令で将来の自分の人格を想像できるはずもないことだけに、それだけに悲しく切ない思いになっていきます。しかも大人になって自分の姿に気付いたとき、その何が悪いの！と開き直れる人間性の場合には別として、誠実な人柄であればあるほど多くの苦しみを抱え込んでいきます。本来自ら育つ力を持っている子どもが、全面的にその力を開花させるには親(養育者)の子育ての在り方は云うまでもなく、子どもに関わるすべての

大人の質が問われるのだと、当然チャイルドヘルプラインという電話やチャットを受け取っている私たちの人間性も問われていると、どうしても思ってしまう私の考え方は間違っているのでしょうか。

子どもからの電話やチャットを受け続けることは自分を問うこと。子どもの傍に寄り添う大人として、子どもの育ちに自からの成長も重ねることによって初めて、子どもの育ちに役立つ伴奏者になっていくことができる。チャイルドヘルプラインにかかわるのは、そういうことであると私は思うのです。そして、自分を空洞化せざるを得なかった子どもたちの声を受け止めているということは、そうあってはならない！と、自分の肝に銘じていると思っています。子どもの人生は子どものもので、子ども自身が人生の主体者であると、そう考えられる大人を一人でも増やしていく。そのことこそがチャイルドヘルプラインという組織の務めであると思うのです。それ故に受け取った子どもたちの声を社会にフィードバックしていくことは、自分たちの使命であり、大きな意味を持つと思っています。チャイルドヘルプラインは、その役割を子どもたちから託されているのではないのでしょうか。勿論三重県のチャイルドヘルプラインのみならず全国のチャイルドラインしかり！です。

チャイルドラインという事業は、チャイルドラインという名の電話業を営んでいるわけではありません。それは子どもからの電話を受けるという具体的な事業を目的化させないということです。チャイルドラインは電話を受けることを通じて、それを越える重要な任務を社会的に担っているのだと思っています。何故子どもからの電話を受ける必要があるのか、子どもの伴奏者たるためにはどんな電話の受け方、その質がどのように担保されなければならないかなど、子どもに選ばれる電話であることを、そのあり方を常に問い続けなければならないのだと考えます。そして更に重要なことは、それによって得た情報を社会にフィードバックすることで施策に反映、子どもにとってよりよい社会づくり「子どもの最善の利益」につなげていくことではないでしょうか。

受け手支え手など常に増やし続けることは、子ども支援者の担い手を増やすことに他なりません。子ども支援者になって関わって下さる人が増えるということは、その人の子どもに対する意識の変化に必ず繋がりが、子どもへの理解者が増えていくことだと私はかたく信じているのです。そして崩壊してしまった地域社会の再構築、昔のようなあり方は無理だとしても、現代に合わせた1つのかたちとして繋がっていくことになるはずなんです。

そうです！チャイルドラインは、ミッションを具現化した事業現場を展開することによって、社会変革を成し遂げる力を持っているのです。それはNPOや市民団体の活動の根幹、使命なのです。私たちがチャイルドラインを運動体と自負する所以です。

今やチャイルドライン支援センターの団体正会員として所属している実施団体の半数以上が、チャイルドラインが運動体であることを理解できていない現状です。社会性が弱まってきているということなのでしょう。それは事業を実施するだけで満足という実施現場を担う団体(人)の自己満足を越える意欲が、欠けてきているということになるのかもしれない。

どこまでもどこまでもチャイルドラインは、受け取った子どもの声を社会にフィードバックすることを通して、子どもの最善の利益が保障される社会づくりをしていく団体であらねばならないと私は思っています。でなければ、波紋を広げ続ける運動体でなければ、子どもたちが抱える人格の空洞化を多少なりとも食い止める力になり得ないと思うからです。

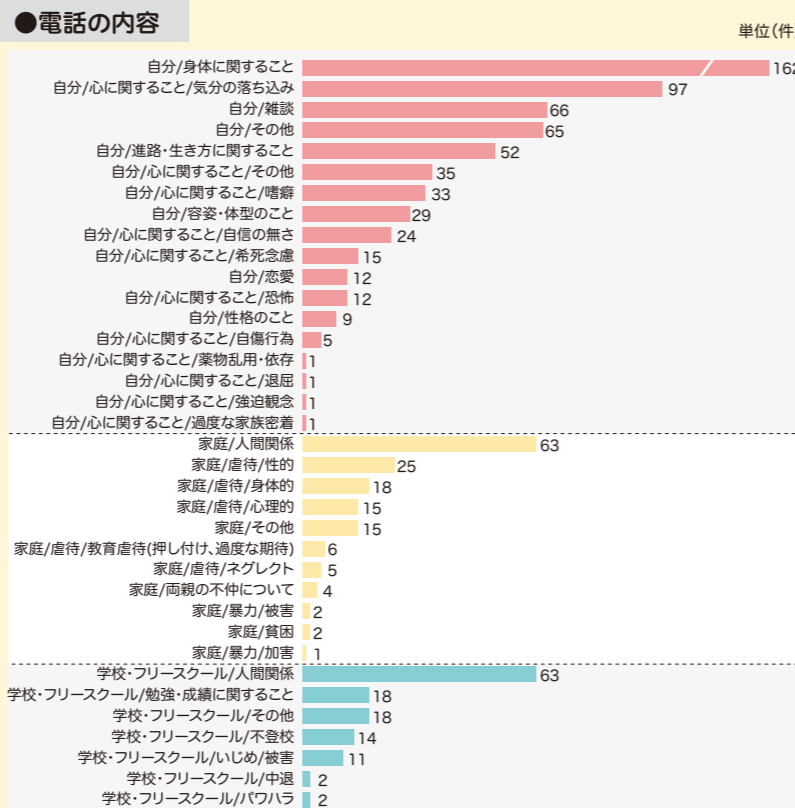
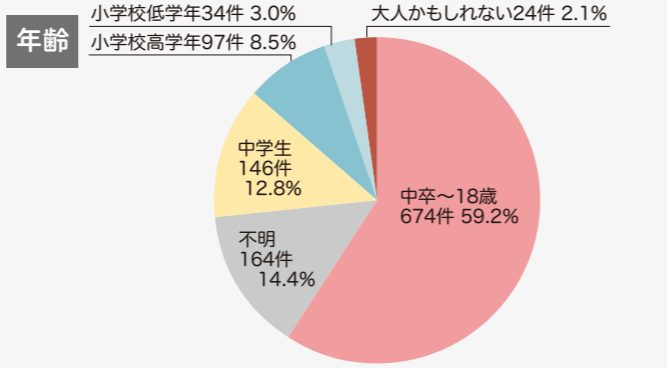
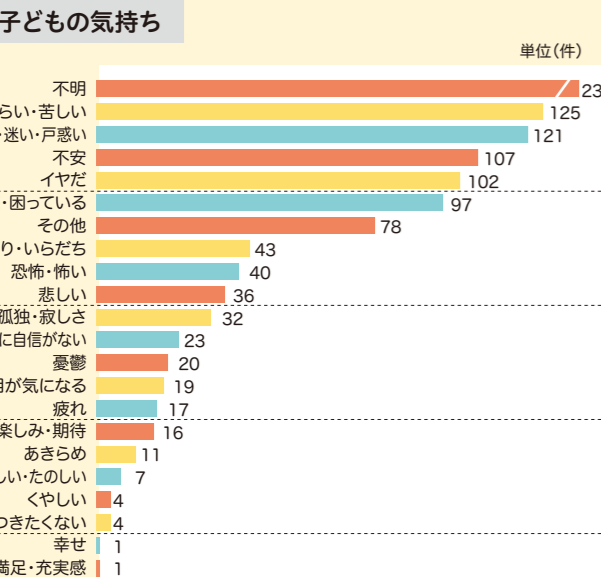
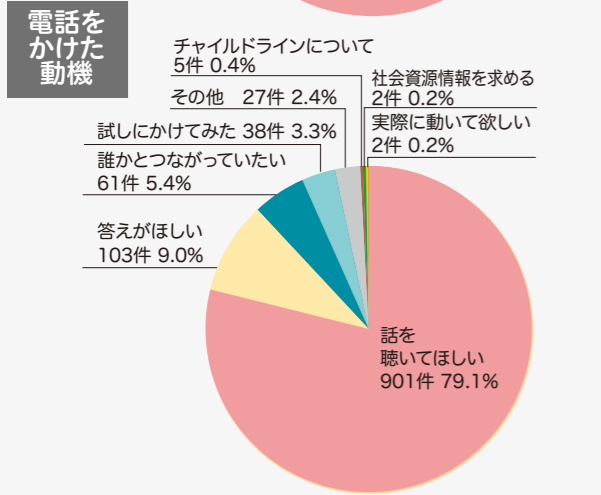
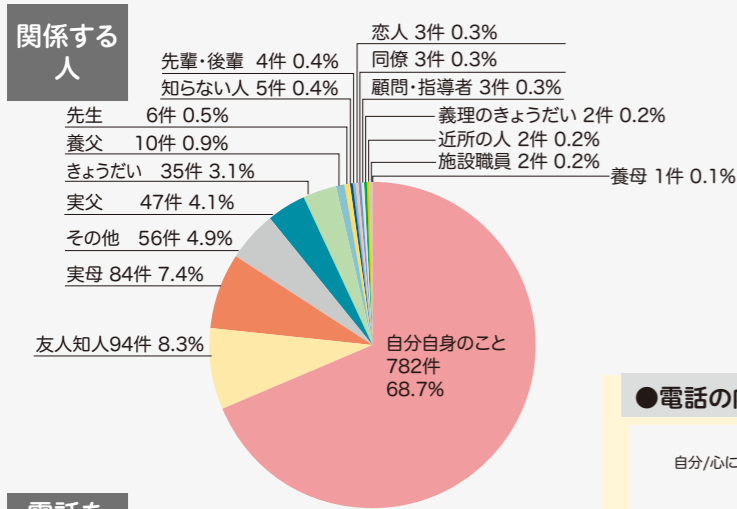
2019年度 子どもの声を受け止める

『チャイルドライン MIE』の報告 ☎0120-99-7777

チャイルドラインは、全国 68 の団体がネットワークを組み実施している子ども専用電話です。三重県では毎日実施できていませんが、実施のない時間は開設している全国のチャイルドラインで受けてもらっています。2019 年度チャイルドラインで受けている三重県発信の電話は 3,594 件ありました。

※使用データは、チャイルドライン支援センターのデータベース（2020 年 3 月 31 日までに入力完了データ）を使用しています。

チャイルドラインでは、安心して話せる電話かどうか、無言や一言の電話が続いて、やっと話し始める子どももいます。名前や年齢・性別など受け手から聞くことはありません。会話が成立した 1,139 件をデータ化しています。



『こどもほっとダイヤル』の報告 ☎0800-200-2555

三重県では、三重県子ども条例に基づき、子ども専用電話相談『こどもほっとダイヤル』を開設しました。子どもの声を受け止め、子どもとともに状況や気持ちを整理しながら子ども主体の解決方法を考えます。専門的な対応が必要な場合は関係機関につなぐことができます。2019 年度は、1,642 件の電話を受け、児童相談センターに 10 件、教育委員会に 3 件、私学課に 1 件繋ぎました。（1 件は教育委員会と児童相談センターの両方に繋いでいます。）

【関係機関】
県子ども・福祉部少子化対策課、同子ども虐待対策・里親制度推進監、県児童相談センター児童相談強化支援室、県教育委員会事務局子ども安全対策監、同生徒指導課、同研修企画・支援課（総合教育センター）、県環境生活部私学課、県警察本部生活安全部少年課、県女性相談所、チャイルドヘルプラインMIE ネットワーク

